

## 石橋湛山

写真は 2017 年 7 月刊行の「ミネルヴァ日本評伝選」。石橋湛山(たんざん)という人間の思想、その軌跡から日本の政治経済史を知ることができる。肉厚の書をじっくり読んだ。まずは、「はしがき」から紹介しておきたい。

一体なぜ、あのような困難な時代にこれほど透徹した歴史認識をもち得たのか？

一体なぜ、日本の将来と世界の動向をこれほどの確に予測して行動できたのか？

一体なぜ、あの剛毅・叛骨・楽観・繊細・不屈・リベラルなど稀有な人格が形成されたのか？

これは誰もが石橋湛山に寄せる素朴な疑問であろう。体系立った理論と徹底した合理主義、常識など意に介さぬ独創性、タフな精神力と溢れ出る熱情、いくつもの抽斗をもつスペシャリストでジェネラリスト、日本一国にとどまらず地球規模で描く遠大な平和構想と理念、初心を貫く律儀で清廉な人格、このような資質や人間性がわれわれを魅了して止まない。一体湛山の魅力の源泉とは何か、われわれを引き寄せるその磁場とは一体どのようなものか。リベラリスト湛山に底通する考え方、思想や哲学とは一体何なのか。このような疑問に向き合いながら、彼の非凡で特異な人生の軌跡を追うことが本書の目的である。

湛山の 88 年の生涯は、明治・大正・昭和の 3 時代に及び、ジャーナリスト・エコノミスト・政治家として各時代にその名を刻んだ。

湛山の人生の軌跡には、不思議と強いうねりがあり、劇的である。戦前は東条英機首相兼陸相など軍部を相手に論戦を展開したため、湛山の率いる新報社は存亡の危機に陥った。戦後はマッカーサー元帥下の占領軍やワンマン吉田を敵に回したため、不条理なパージや自由党から二度の除名処分を受けた。このような政治的圧迫に直面しながらも、それに屈することなく敢然と戦い、窮地を脱するというパターンである。時流に抗し、挫折と克服を交互に繰り返す「反骨」の生涯であった。湛山が日本を、ひいては世界を善導しようと粉骨砕身し、初心を貫こうとする真摯さや不撓不屈の闘志は、約 800 年前に日蓮上人が鎌倉幕府という巨大な権力を相手にして戦った史実や故事を彷彿させる。

では一体この湛山を動かしたものとは何か。「思想は人間の活動の根本であり、動力である。其の善いか、悪いか、換言すれば其れが能く国民の活動を自由にし、盛んにし、生活の向上発展を齎すものであるか、何うかに由って国家社会の栄枯盛衰は決定する」



—『東洋経済新報』（1915・8・5）

では今に生きるわれわれは、このような湛山の生き方から一体何を学ぶことができるのであろうか。本書の秘やかな狙いはここにある。

目次から

- 第1章 人間形成
- 第2章 東洋経済新報社
- 第3章 小日本主義の言論—1910年代
- 第4章 植民地全廃論—1920年代
- 第5章 転換期—1930年代
- 第6章 言論統制—1940年代前期
- 第7章 日本再建構想と政界転身—1940年代中期
- 第8章 石橋積極財政とGHQ・吉田との対立—1940年代後期
- 第9章 通産大臣と日中貿易関係—1950年代中期
- 第10章 総理大臣と日中米ソ平和同盟—1950年代後期～60年代
- 終章 湛山イズム

終章から

湛山の思想と行動の奥底には、「自由主義と個人主義」、「合理主義と現実主義」、「実利主義と民主主義」、「世界主義と平和主義」といった四つの原理があり、それが湛山の特異な言論や行動の起爆剤となったわけである。その言論にしても、経済政策にしても、政治活動にしても、発想が柔軟で特定の枠の中には納まらない。常識を覆す新鮮かつ奇抜さがあり、気宇壮大なスケールを描く。「小日本主義と植民地放棄論」、「脱冷戦と日中米ソ平和同盟」など、いずれも非凡で独創性にあふれた視点と論理体系を備えている。

あとがきから

この間の湛山研究の進展ぶりには瞠目せざるを得ない。わたしが研究に取り組み始めた頃の湛山は、「病魔に襲われてわずか2カ月で総理大臣の座を降りた“悲劇の宰相、”であった。ところが21世紀の今日では、「政府や軍部に抗して“小日本主義、を唱えた東洋経済新報社の石橋湛山」と高校の日本史教科書でも紹介されるほど、リベラル・ジャーナリスト湛山が堂々と市民権を得ている。隔世の感があるが、これも多方面での湛山研究の賜物といえる。

(2017年11月16日)